
IS インフィニット・ストラトス～魔神見参！！

ランサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス〜魔神見参！！

【Nコード】

N9209X

【作者名】

ランサー

【あらすじ】

織斑 一夏のハーレムを崩したくないがただオリ主にチート能力をあげたいと願って作った、だめ作品です、こんなダメ作品を見たい人は見てください。最後に……………パイルダーオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

プロローグ（前書き）

よくある転生物語。

プロローグ

ココはドコだ？

何が起こったんだ？

「すまん」

あの……………あんだダレ？

つうかココはドコだよ？。

「実はな手違いがあつてお前を殺しちゃった」

は！！何を殺しちゃっただよ！！

なに訳のわからん事を言つてやがるこの目の前にいる男は！！。

「俺は神様だ……まあ訳があつて殺した」

「ふざけんな神だが何だか知らねーが勝手に殺してんじゃねーよ！」

「いや、そんな可愛い顔で怒ったら逆に俺、照れちゃうよ」

「可愛い言つなー!!」

そう俺は何故か男なのに顔が女の顔なのだ、しかも友達曰く「ロリ顔で可愛い」らしい。

しかも身長も150と低く初対面の人間には間違つて俺を女と勘違いする。

これも俺の黒歴史だが俺に告白した男もいるくらいだ俺が普通に「悪いけど俺、男だから」と言つて断つて告白した男が「あり得ない!!」と大声で叫んだ事も覚えてる、それから俺に告白する男やナンパする男が絶えず、より俺は男らしくするため乱暴な口調になったが逆に「ボーイッシュで逆に可愛い」と言われるしまつた。

「男に可愛いって言われても嬉しくねーよ!!」

「ははは、怒つた顔も可愛いよ」

クソー!!

好きでこんな顔になった訳でもないのにつつか、この男マジでぶっ飛ばしたい。

「それで君を死なせたのは神である俺のミスだ、そこで君に新たな人生をプレゼントするよ」

「……………は!?!」

「最近、人間界でよく二次小説に出てくる話だ、つまり君は転生者になるんだよ」

「なんだと!?!」

まさか俺が転生者になるとは、俺の数少ない友達が二次小説を書いていて転生物語をよく書いていたのを見たことがあるが俺の友達が書いたのは大半がチート能力で原作崩壊物であった。

「それじゃあ転生させるぞ、ちなみに君の性別を逆転させるから」

「なにー!」

おいそれはどつ言つ事……。

「じゃあ第2の人生を楽しめよ」

「ふざけんああああああああああ!!」

冗談じゃねーよ男の俺が女になるなんて冗談じゃねええええええええ!!。!

「最後に原作加入したときを楽しみにな」

最後にくそやろうが言った言葉を聞いて俺は意識がなくなった。

原作開始前（前書き）

弾の口調っていまいちわからない。

原作開始前

俺が転生してからだいぶ状況がわかった俺はどうやらIS………つまりインフィニット・ストラトスの世界に転生した事がISの存在や白騎士事件などまさにインフィニット・ストラトスの世界である事を物語っていたからだISの世界は男の俺に無縁と思ったが違っていた俺はあのおくそ神のおかげで女になってしまったからだ、それを確認するように男の象徴は無くなり何故か胸も膨らんでいるからだ。

そして見た目は自分で言うのもあれだがルックスは正に美女で髪型は黒髪で大和撫子を思わせる感じであるが、俺の性格が性格なだけに見た目と性格が反比例してよく周りに驚かれる。

俺はそれからISの世界と気づきながらも普通の学園生活を送っていたちなみに原作キャラの主人公である一夏とも中学に知り合い、それから鈴や弾とも知り合いつるんで遊んだ、一夏達と遊んで楽しく現在中学3年……………。

「付き合ってください!」

「ああ、じゃあドコに遊びに行く?」

現在秋……自分のクラスで一夏に告白した別のクラスの女子だが
見事に一夏が勘違いして女子は玉砕。

「これで玉砕された女子は何人かな弾、覚えてる？」

「知らねーよ、もう数えるのも疲れたてかムカついてしょうがねえ」

俺と弾は一夏を見て俺は呆れて弾は呆れた表情とムカつく表情の紙
一重の状態であった。

あ、残念そうにトボトボ歩いて教室を出ていく女子………可哀想に。

「どうしたんだろっあの子？」

「一夏、本気で言っているのか？」

「馬に蹴られて死ね」

俺と弾はそう言った一夏のルックスは悪くない普通にイケメンでジ

ヤニーズ系に入っておりモデルの雑誌に乗っても可笑しくない。

しかも誰にでも優しく手助けするため一夏の性格に惚れて一夏を狙う女子はかなり多い、告白する女子はあとを断たないが一夏の勘違いで玉砕で終わる。

「お前は本当に…… 鈴も苦労するよ」

「なんでそこで鈴が出てくるんだよ」

コレだからな一夏は…… 鈍感にもほどがある。俺は今中国に行ってしまった親友を思って……

「自分で気づけバカ」

俺はそう言った。

それから学校が終り俺は家に帰宅した。

「ただいま」

「おう帰ってきたか雪！」

とてつもない凶悪な顔で俺を迎えてくれた俺のお爺ちゃん。

ちなみに今更だが俺の名前は 風紀 ふうき 雪 ゆき。

そしてお爺ちゃんは白髪頭に隻眼で顔もコレまた凶悪な顔でカタギの表情とは思えない。

名前は 風紀 ふうき 十字 じゅうじ。

「お爺ちゃん、また一日中とか研究してないよね？」

「な、なんのことかの雪」

どもって言ったなら説得力ないよお爺ちゃん……お爺ちゃんは昔から発明が大好きで暇さえあればいろいろな研究をしている、掘っておくと一日研究なんて日常茶飯事だ、これに内のお袋も心配してる。

「お爺ちゃん！もういい年なんだから研究ばかりはやめろよ！！」

「何を言う！雪、ワシはまだピンピンしてるわい！！」

ワハハハと笑っていたが腰からギクリと音が聞こえた。

「…………お爺ちゃん」

「わ…………ワシはま…………だ…………」

俺はため息をはいてお爺ちゃんをお爺ちゃんの部屋に戻してベットに寝かせた。

そう言えば、そろそろ原作開始の時期に近くなったね。

原作ブレイクに興味はないけど親友が傷つくのを黙って見てるのは趣味じゃないしIS学園に入って一夏を助けてやるか。

原作開始

四月……この年はいろいろと新たなスタートであろう、進学に就職と出発点と言ってもいいだろう。

俺が通うES学園もそこは変わらない中学を卒業して楽しい学校で一日が始まりだと思うが……教室は沈黙に包まれていたと、言うよりもクラスの全員の女子が一夏に視線が集中してるからだ。

つまりあれだクラスは男子が一人で後は全員女子と変わった風景に一般の男なら「なにハーレムじゃないか!」「男の敵!」といろいろと騒ぐが実際にこんな空間を体験したら非常に辛い事だろう。

つまりその体験を一夏がしているわけだから一夏は凄く気まずいであろう。

俺は席で一夏と視線があうと一夏が口パクで「頼むから助けてくれ」と言っているが俺は「が・ん・ば」と親指をグツと立てて一夏にエールを送った一夏の表情が変化したが俺は知らんぷりだ。

さて速いとこ先生はこないかな。

一夏 Side

これは……………想像以上にきつい……………。

クラスが俺、以外はみんな女子なのだから気まずくて仕方がない、そもそもIS学園は女子校と変わらない……………と、言うよりも女子校なのだからISは女性にしか扱えないのだから、何故か知らないが俺はISを機動させて俺はほぼ強制的にIS学園に通う事になってしまったが……………改めて言おう、想像以上にきつい。

俺はサード幼なじみの雪と視線をむけて口パクで「助けてくれ」と言ったが雪は「が・ん・ば」といい笑顔でメールを送った絶対にこの状況を楽しんでいるだろう雪!!。

一夏 Side OUT

それから先生が来て自己紹介が始まり俺はいまだに気まずい雰囲気
で焦っている一夏を見て思わず心の奥で笑っていた……………そこでい
よいよ一夏の自己紹介の番がきたようだ。

「えー……………えっと、織斑一夏です。よろしく願いします」

ありきたりな挨拶に周りの女子は「もっと喋って」という視線が伝
わってくる俺は前の席にいる一夏の背中を叩く。

「もっと喋ろよ一夏、みんな要求してるぜ（小声）」

「無茶言つなよ、こんな状況で他に何を言えと（小声）」

「なんでも良いから言えこのままだったら暗い男のレッテルが貼ら
れるぞ（小声）」

俺は一夏に伝えた時であったが一夏は……………。

「以上です」

俺は思わず机からズッコケそうになった俺は一夏に……。

「おい、少しは喋ろって言っただろ（小声）」

「だから思いつかないよ俺にどうしろと（小声）」

「特技でもなんでも良いだろうが（小声）」

俺は一夏の行動に呆れた。

一夏みてみるよ他の女子達はもっと喋ろと欲求している視線がお前を射ぬいているぞ。

そんな会話をしている時に一夏は突然、頭を殴られた。

そこにいたのは俺達がもっとも知っている。

「げえっ 関羽!?!」

「お、お前はギロ口伍長!?!」

パンツッ！パンツッ！。

俺と一夏は出席簿で頭を的確に叩かれました。

「誰が三国志の英雄と赤いカエルの機動歩兵か馬鹿者」

このネタ知ってるのね千冬さん。

そうこの人こそ一夏の実姉にして世界最強のIS操縦者、織斑 千冬である。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

千冬さんが来てクラスの皆が静まり帰った、と言うよりも真剣になったと言ったほうが正しいのかな。

流石は女王でブラコンなだけはあるな、うんうんと心で頷いたら千冬さんの出席簿アタックが頭に命中した。

「な、何故？」

「不愉快な気分がしたのでな」

この人は人の心を読むのか、もしかしてニュータ……………バシンツ！！

痛い（涙）。

「何か言ったか？」

「いいえ言ってます（涙）」

この人に心の中でも逆らえませんが（汗）。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十

六才までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

凄い暴力発言だな遠回しに言ってるけど逆らう事は許さない事ですね、わかりました暴君魔王……………バシンッ！！

だから痛い（涙）。

「懲りないようだな」

「本当にすいません（涙）」

教師に逆らっては絶対にいけないようですね（汗）。

それからIRS学園での授業が始まったのであった。

IS学園の一日(前書き)

なんだが最後は自分でもよくわかりません、セシリアファンの皆さんすいません。

IS学園の一日

一時間目のIS基礎理論の授業が終り一夏はギブアップ状態で机に座っていた。

まあ確かに授業が終わって一休みといかず他のクラスの女子が一夏を見に来ており一夏に全視線が集中して一夏はぐったりしているわけだ。

「よ、人気者だな一夏」

「雪、お前なこれがそう見えるのかよ」

ぐったりと疲れたように一夏は俺に言った、まあ知り合いがいないで男、一人は辛いよな実際。

「まあ実際に初の男性IS操縦者が珍しいんだから、この視線はしようがないぜ諦めろよ」

「うう〜日本に初めて来日したパンダの気持ち少しわかった気がする」

パンダか……………確かに一夏を見る視線はアイドルを見ている感じがするからな女子達から俺は一応、中学の時に一夏と知り合ったから一夏を親友として見てるわけだから気にしないけどなあんまり……………
…だけど（汗）。

「……………。」

ものすごい殺気がこもった視線をポニーテールの女子、箒から感じるので俺は何かしたか（汗）。

あ、席を立ってコッチに来た。

「……………ちよつといいか」

「え？」

彼ノ之箒は一夏に話をかけた。

「……………箒？」

「一夏だれこの子」

俺は原作を見て知っているが一応、一夏に誰か聞いてみる。

「ああ雪は知らなかったよな俺が前に話したファースト幼なじみの
箒だよ」

「へえ君が一夏のファースト幼なじみの筱ノ之さんか俺は風紀 雪
だ一夏のサード幼なじみだよよろしくな」

俺は笑顔で箒に握手をするが箒は敵をみるように俺を睨むが一応握
手してくれた。

「……………よろしく」

だからさ俺が何かしました箒に何もしてないよ俺（汗）。

「……………一夏話がある来てくれないか」

「え、ココでいいだろ」

一夏……お前な久しぶりに再開した幼なじみなんだから簿は二人で話したいんだからさ。

「いよいよ一夏、行ってこいよ」

「いいのか雪？」

「良いよ久しぶり再開する幼なじみなんだから話してこいよ」

俺はそう言って一夏と簿は教室を出ていった……。

しばらくして休み時間は終り二時間目の授業が始まったが一夏は原作どつり参考書を捨ててしまったようだ………バカだろ一夏。

普通に捨てるなよ一夏、めんどくさがりな俺でも参考書は読んだぞ。

そして二時間目が終り休み時間。

「一夏、一言だけ言っぞお前……バカだろ」

「ぐ、ストレートに言つな雪」

「当たり前だ参考書を古い電話帳と一緒に捨てるバカがどこにいるんだよ」

「……………どこに？」

「疑問に思つなお前だろ」

バカなトークを繰り返して親友と喋る俺だが、そこに一人の女性が現れた。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「うん？」

白人の女性でいかにもお嬢様オーラを出している女性がいた……………そ

の女性はまさにこの時代の女性が偉いと思っている人種の間であつた。

その女子はイギリスの代表候補生のセシリア・オルコットであつた。

「聞いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

正直、俺はこの手の人種の間は嫌いだが今は確かに俺も女だがコイツみたい、女は偉い。見たいな人間とは付き合わないようにしている。

それに以前ニュースであまりにも行き過ぎで男に対する暴行や権力を振りかざしすぎて権威を剥奪された女性議員もいたくらいだからな。

初対面でそんなやつと比べるのは悪いがコイツもそんな女性と同じ人種とを感じる気がするから俺は……。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして入試主席のこのわたくしを！？」

うるさいなイギリスを強調するなよセシリアロール巻。

「なあー夏、こんなやつ無視しようぜ」

「なんですの貴女は！このセシリア・オルコットに向かってなんて口の聞き方ですの！」

「知らねーよ、テメー見たいに見下すしか脳がないやつと話す価値も聞く価値もないんだよ！」

「な、ななな」

セシリアはワナワナとして体を震わせていた。

「とつと自分の席につきやがれ、このロール巻が！」

セシリアの中で何かが切れた。

「あ、貴女は！もう許しませんわ！このイギリス代表候補のセシリア・オルコットにむかってロール巻ですって！！」

「ロール巻が何か言ったか？」

俺は聞こえない素振りで挑発してセシリアをいっそう怒りを表していた。

周りの女子達はいきなりの事態に視線が一気に俺達に集中していた。

そこで三時間目の始まりのチャイムが鳴った。

「お、覚えてなさい！」

覚える気は全くないぜ。

「大丈夫かよ雪、あんなに挑発して」

「大丈夫だって、あんなロール卷」

俺は一夏に心配されたが俺は気にせず自分の席についた。

「それではこの時間は実践使用する各種装備の特性について説明する」

そして三時間目の授業が始まり今度は山田先生ではなく千冬さんが授業の説明にしていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

ふ、と思い出したように言った千冬さん。クラス対抗戦か………まあ俺には関係ないな代表候補でも専用機も持ってない俺が………。

「はいつ。織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

おおどんどん一夏に推薦するな女子達は、まあ男性初のIS操縦者なのだから女子達は推薦してるのだろうな。

「お、俺!?!」

一夏は思わず立ち上がった、そんなに驚くなよ一夏。

こうなる事は予測できただろ………多分。

「だったら俺は雪を推薦する!!」

.....はい?。

なに言ってるのコイツ?。

「では候補者は織斑一夏と風紀雪.....他にいないか?」

ちょっとまってコラ.....。

.....プチン。

「テメーは何、幼なじみを売ってんだコラアアアア!!」

「ぎゃあああ!!」

一夏の背中にドロップキックを食らわして一夏は黒板にめり込んだ、
周りは唾然としているが俺は気にしない。

「おいコラ！なに俺を巻き込んでんだ、ああ！……！」

「いや……ココは幼なじみとしての気遣いで……その（汗）」

「そんな気遣い、いるかああああああ……！」

「ギブギブギブギブ……！」

俺は一夏の首を閉めて怒鳴る……ふざけんなよこのフラグマシンめ
！……！。

「納得がいきませんわ……！」

そこにロール巻が乱入してきた空気読めよ。

「だいたい男が……」
「やつかましゃあああ……！」
「なんですの……！」

「テメーは及びじゃねーんだよ！ロール巻がああああ！！」

「貴女またロール巻って……」

「うるせえ！俺はいまコイツの制裁に忙しいんだよ！テメーは祖国の羞恥心を自慢してろ！ロール巻！！」

ブチッ……セシリアの中で何かが切れた。

「も、もう許しませんわ二人に決闘を申し込みますわ！！」

……かくして俺と一夏はセシリア・オルコットに決闘を申し込みました。

決闘までの準備。(前書き)

こんなの筈じゃないと言っ方は見ないでください。

それと一夏は………南無。てか当たり前。

決闘までの準備。

さて……………何故かは知らないが一夏とバカをやってしまった為に俺もセシリアと戦うはめになってしまった、まあ暴走して自分の自業自得は理解してるけどなんか納得は出来ない。

俺は代表候補生でもなければ専用機があるわけでもない、そもそも出発点がセシリアと違い過ぎる俺は一夏と変わらないのだからISなんて試験の時に乗っただけで後は動かしてもいないし、どう考えても代表候補生のセシリアとは技量も経験もあまりにも差がありすぎる一夏みたいに専用機があれば、まだ勝てる希望はあるだろうが俺みたいな一般生徒が国や企業が専用機を用意してくれるとも思えない今の俺は女であり男ではないのだから。

男なら特別な理由で専用機を用意してくれる可能性はあったかも知れないが同じこと言うが一般生徒の俺に国が専用機を用意するほど太っ腹とは思えない仕方なく俺は量産機で戦うしかないのだ。

さてどの量産機で戦うかだな打鉄は性能が安定してどの局面にも適うで戦う幅は広いが一撃で決める要素が低い、性能が安定して安心して戦える事も重要なポイントだ。

ラファールは打鉄と比べたら安定感は低く少し癖があるが操縦法を

間違わなければ打鉄より強い性能を発揮する事が出来る。第二世代でココまで性能が高く作れるのは流石はフランスは世界第三位なだけはある。

さてどの機体で戦うかな俺は悩んだがISの戦いは素人でしかない俺は打鉄が妥当であるが、しかし相手は専用機を使ってくる多少のリスクは覚悟してラファールを使うことも手だが……………どうしようかな。

「まあ……………まだ決闘まで日はあるから気長に考えよう」

俺はそう思いベットにダイブした。この部屋が一人部屋なのは嬉しい理由は知らないが俺は一人部屋であった。つまり自由に部屋を使えるのだから嬉しくて仕方がないさてとセシリアとの対策を考えたら今日は……………。

ドンドンー！

ドアを叩く音が聞こえた誰だろうと思いい俺はドアをあけた。

「よ、よ」

一夏であった。

……………バタン。

よし寝よう。

「頼む入れてくれ雪！」

「やっかましゃあ！勝手に俺を巻き込んだ男がノコノコ現れて何しに来やがった！！」

「そ、それは謝るから部屋に入れてくれ頼む！」

一夏は廊下で俺に叫び一体何をやらかしたんだ一夏のやつ。

ココで騒がれてクラスの皆に変な噂を流されたらたまったもんじやないから俺は一夏を中に入れた。

「で、何があつた？」

一応聞いてみた。

「はい、実は……」

何でもファースト幼なじみの箒と同じ部屋になり、何故か知らないが箒を怒らせて部屋を追い出されたとある程度理由を聞いて俺はため息を吐いた。

「お前が悪い、一言いっせー夏……とりあえず馬に蹴られて死ぬ」

「相変わらず酷い言われようだな」

「当たり前だ、だいたい好意を持ってる女子に向かってお前の対応はなってる」

「俺にそれはないよ」

「夏はないないあり得ないと言って首を横に振る……ダメだ鈍感もココまでくると怒るどころか呆れてしまう。」

「はあ、もういい、それで俺の部屋に他に何のようできた」

「悪いと思ってるけど一日で良いから泊めてくれないか」

「ああ、わかったどうせ箒って子を怒らせて部屋を追い出された口だろ」

「おっしゃるとおりです」

箒も素直じゃないよな素直な性格になれば可愛いのに……だってあの日本人離れした反則な胸に容姿も大和撫子と言われるくらいの物を持っているスタイルも抜群だ。

俺なんか鈴並みの身長だし胸は鈴よりあるが平均だからな巨乳ではないあれを見ると嫉妬心が出て仕方がない、流石に16年も女になると男としての感性が低くなり女性としての自覚もだんだん高くなって来たからな。だが口調はいまだに前世の時のままんだけどな殆ど。

俺は一応気になり……ドアの外を見てみるかと思えば俺はドアを開け

るよ……。

「……………」

「……………なんのようで（汗）」

篤さんが廊下にいました、しかも物凄く睨んで……………。

だから俺は一夏に何もしてないよ!!。

篤 Side

六年ぶりに再開した私の幼なじみの織斑一夏。

小学校の時は一緒に剣道をして互いに剣道の実力を高めあい一緒に練習した私の初めての初めての友にして初めての異性の友でもあった。

小学校の途中で姉がISを開発して私の家族は政府の都合により引

越しを繰り返さなくてはいけなかった、そして一夏とも離ればなれになってしまったが私は六年ぶりに一夏と再開した。

小学校のときよりカツコよくなり凜々しくなった一夏に私は嬉しくて仕方がなかったが教室で一夏に親しく話している女性を見た。

久しぶりに再開したのだから私に話をかけるべきではないのかと一夏は私が知らない女と話していて私は苛立った。

一夏と久しぶりに話を聞いて、あの女はダレだと聞いた一夏曰く

「俺のサード幼なじみ」

一夏と話して見たが今日、一夏と喋っても一夏は嬉しそうにあのサード幼なじみの話をしていて、まるで自分の恋人みたいに、私はその自慢話を聞いて一夏はあの女が好きなのかとさえ思ったが………
…一夏にあの女は好きなのかと聞いた。

「ああ、好きだよ（友達てきな意味）」

その瞬間、私は頭が真っ白になり一夏を部屋から追い出してしまった。

一夏がああ女の部屋に入るところを見て私は部屋の前に立って、あの女にあった。

箒 Side OUT

雪 Side

とりあえず俺は箒も中に入れたが……………気まずい(汗)。

「あの……………彼ノ之さん」

「なんだ(ギロ)」

うっ……………絶対に勘違いしてる。

一夏が勘違いするような事を言うから……………鈍感すぎたる一夏。

「……………一夏」

「はい！」

「貴様はこの風紀と言う女が恋人なのだろ！」

はいはいはい！！！！！。

何を言ってるんですか！！幕さん！！

「お前は好きと言っただろ！だから「あの篠ノ之さん」なんだ！」

「勘違いしてるようですが俺は一夏と恋人関係ではないですよ」

普段は男口調だが、この時だけは敬語で話す。

「確かに俺も一夏は好きですよ、でもそれは幼なじみとしてつまり友人としてです多分、一夏も同じ意味で言ったんだと思いますよ、そうだろ一夏」

「ああ、そうだよ雪が恋人関係じゃない幼なじみだ」

「そ、そうなのか、ならば何故、そう言わなかった一夏！」

「いやお前が勝手に……………」

「言い訳はきかん！！」

また箒に怒鳴れて一夏はたじたじになっていた……………それにしても良かった恋人と勘違いされなくて一夏とは俺も友人としてしか見えないからな。

「そうだ一夏、筱ノ之さんと話があるから部屋を出ろ」

「ええ、なんでだよ」

「女の会話に男は出ていく」

「女って普段から「ああ！」「すみません直ぐに出ていきます！」

そう言って一夏は俺の部屋を出ていった。

「さて彼ノ之さん、やっと話が出来ますね」

「敬語はやめる同い年だ、それに私の事は箒で言い」

「わかったならば箒、率直に言うけど一夏の事が好きなんだろ」

「なあ！／＼／」

箒は突然、顔を赤く染める凶星を言われて赤くするなんて、よっぽど一夏の事が好きなんだな。

「見ていてわかるよ一夏を見る目が恋する乙女だったからな」

「わ、私は別にい、一夏と」

「そんな事だと別の人に一夏は取られちゃうよ」

俺はビシッと指をさして箒に言う一夏は普段はあんな間抜けだがイザという時はやる男だ、その性格があり中学時代から一夏に恋する女性は数多くいたからな、まあ全員玉砕して終わったけど。

「一夏は超がつく鈍感だけど普段は間抜けなくせにイザという時は頼りになる所がある筈も経験があるだろ」

「……ああ／＼」

「その性格が原因で一夏は中学の時に数えきれない女性のハートを掴みとったんだ、まあ全員玉砕して終わったけど」

最後は苦笑いして笑うしかなかった、あそこまで積極的にアピールしたくせに気づかない一夏の鈍感には怒るより呆れるしかない弾と俺は見ていてそう感じたからな。

結局鈴も一夏に自分の気持ちを理解してもらえず鈴は中国に行ってしまったからな。

「俺も筈と同じ一夏の幼なじみだけど別に俺は一夏に恋心を抱いているわけじゃない、これだけは理解してほしい、だけど筈」

俺はビシッと指をさして俺は本音を告げる。

「俺は織斑一夏の友人だ一夏に害をなしたり傷つけたりする人は男であれ女であれ俺は許すつもりはない、それだけは言うぜ！」

そう言っつて箒も俺の事を理解してくれた……………そして俺はニッコリと笑い箒に尋ねる。

「ねえ、箒」

「なんだ？」

「こんなにいろいろな美女に好意を抱かれてるのに、それに気づかない男は罪だよね」

「そうだな」

箒も俺の考えが理解して良い笑顔で語ってくれた。

「美女の幼なじみの二人を傷つける男に制裁を加えるのは当然だよ
ね」

俺達は互いにニッコリと笑い、廊下で待っつてい一夏に……………。

ドアをあけ。

「「一夏」」

「箒、雪………ギャフン!!」

一夏は二人の同時鉄拳を顔面にもらい変な声をあげた。

「お、おい行きなり何を」

一夏は固まった、それは二人がいい笑顔で拳を握ってゆっくりと近づいてくるから、その独特な行為に一夏は恐怖を感じる。

「美女の幼なじみの乙女心を傷つける男には」

「その美女で友人想いの幼なじみを売って自分の身を守ろうとする男には」

二人は同時に語る。

「「制裁を加えるのは当然だよな」」

「まて、話せばわかる!」

「問答無用!」

一夏の悲鳴が廊下全体に響くのであった。

決闘までの準備。(後書き)

次回はセシリアとの戦いです、遂に現れます鋼鉄の巨人が!!!!!!。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9209x/>

IS インフィニット・ストラトス～魔神見参！！

2011年10月29日05時08分発行